2024 年 2 月 2 8 日（水）

「水曜サロン with 赤堀会長」第 5 期 第 9 回（通算 6 8 回）

アートを用いて研究すると『何』が見えるようになるのか？教育研究の新たな展開

１．内容

・アートベース・リサーチ（ABR）について

・教育実践との関わり、経験から ABR の可能性を探る

・アートを用いて研究すると児童生徒の『何』が見えるようになるのか？教育研究の新たな展開

２．所感

本日の岸先生のお話は非常に衝撃的でした。アートベース・リサーチは、初めて聞きましたが、人文社会学の研究にアートを入れることで、言語的な記述や客観的な分析では捉えきれない、人間の感情や身体感覚に迫ることが出来る。インタビューやアンケートより大きな情報を得られる。言葉では説明できなくても写真の力を借りながらその深みを説明するというイメージでした。

本日は、具体例として、絵、詩、小説などをご紹介いただきました。例えば、手型を書かせたとすると、なぜその色にしたかなど、そこから会話が生まれる。これまでのゼミの評価基準ではできなかった多様性や関心、才能、有能さを捉えることが出来るようになった。メッセージ性やどのような議論を呼び起こしたかに価値があると。

また、データ化しなくてもよい研究方法があるのではないかとの投げかけもいただきました。データ＝評価ではなく、その間に評価者の認知が加わる、その認知を認めていかなければならない、データは必ずしも数値でなくてもよい、といっても評価者のバイアスがかかる、例えば、評価者に音楽の理解がなければ、評価者が困るかもしれないなど、議論が展開されました。そして、一人一台端末は、自分で表現できるので、アートベース・リサーチと相性がいいとも。

最後に、岸先生のシリア内戦時の受け入れ国との葛藤の問題解決の経験のお話でした。人間は認知的な理解だけでは共生できない、分かち合いたい、一緒に作り出そうといった情動や身体性が重要になることが分かってきたというお話も印象に残りました。これからの時代に、とても可能性のある研究方法、評価方法になるのではないかと感じました。

岸さん、本日は、衝撃的なお話をいただきまして誠にありがとうございました。

以上